



# 制服に袖を通せば気分はヒーロー

守山市消防団の夫婦分団長  
宇野 克文さん、久美子さん

大門町の宇野 克文さんはサラリーマン(電気工事士)。久美さんは自営クリーニング店を切り盛りする主婦。でも、消防団の制服(活動服)を着ると、まちのヒーローになれる気がするのです。今回は、守山市消防団の夫婦分団長として活躍する宇野さんご夫婦取材しました。

制服の消防団はヒーロー  
責任や苦勞も楽しめる

火災などの災害が発生すると、湖南広域消防局北消防署の消防車両・消防隊とともに、速やか

に現場に駆けつけて初期消火や消防活動の補助にあたる市民がいます。市内7学区の分団と女性で構成する守山サンレディー(MSL)分団、計219人の守山市消防団員たちです。日ごろは会社勤めや自営業、

主婦などそれぞれ仕事を持ちながら、災害発生の一報が入ると要請を受けて出動します。また、要請が入る前でも、火災を察知すれば直ちに出勤できるように準備を整えています。心配そうに見守る人たちの中を、防火服や

制服を着た団員が現場に入っていきますが、現場の状況はその度に違うので何をするかというマニュアルはありません。消火活動をしたり、パニックに陥った住民を介抱したり、各々の判断で活動します。

活動は火災や災害の時だけではありません。防災訓練や防災イベント、啓発などさまざまな活動に参加します。制服を着た消防団員が消防車両に乗って颯爽と活動する姿は、市民や子どもたちの目には、まちを守る

ヒーローに見えるかもしれません。そう思うと、昼夜を問わない招集や仕事中的呼び出しなど大変な活動も、肩ののしかかる使命感や責任感も楽しく思えてくるといいます。

「まさか」の勧誘が縁で入団  
平成31年に夫婦分団長任命

平成31年4月、大門町の宇野 克文さんは守山市消防団守山分団長に、久美子さんはMSL分団長に任命されました。普段の団活動は別々だし、ご夫婦で消防団の活動をしている団員はほかにもありますが、揃って分団長を務めるのは、とても珍しいそうです。

おしどり夫婦分団長も消防団に入ったきっかけはバラバラ。克文さんは18年前に町内の人から頼まれて消防団に入りました。久美子さんも何度か勧誘されていたけれど、子どもが小さいからと断っていたそうです。少し子どもの手が離れてからも、正直「面倒だな」という気持ちがありました。しかし、地域の役に立ちたい気持ちもあったので、つい「消防団長から直接誘われたら入る」と言ってしまうました。新米団員の克文さんから見れば団長は雲の上の存在。まさかと思っていたのに、当時の消防団長が自営のお店に来て直接勧誘。断る事もできずに1年遅れてMSL分団に入ることになりました。

安全を守る厳しい訓練で  
誇れる守山市消防団に

消防団員になった宇野さん夫婦はそれぞれ先輩や仲間と鍛えられ、助け合いながら成長しました。久美子さんをMSL分団に勧誘した当時の消防団長は、訓練や礼式などの活動ではとても厳しい人でした。もちろん、まちと団員自身の安全を守るためです。適度な緊張の維持や機敏な行動のための訓練をするだけではなく、消防学校の教育訓練を受講したり救命訓練を受講したり、有事に備えた知識や技術の習得の場にも積極的に参加しました。その時の訓えのおかげで「どこへ行っても恥ずかしくない」

活動ができる」と自負できるようになりました」と克文さんは胸を張ります。活発な消防団活動は守山のカラーであり、多くの消防団OBから脈々と引き継がれてきた証でもあります。

制服を着ると気持ちもパリッ  
夫婦の会話や生活にメリハリも

消防団に入ってから、消防団員の家から火事は出せない。「火事や災害はいつあるかわからない。いつ何があっても出動できるようにしておく」など普段から適度な緊張感を持って生活するようになりました。夫婦で分団長になった今はさらに「仲間がケガをしないように」など使命感と責任感は一層大きく

なりました。それでも、克文さんは「初めて出動した時、サイレンを鳴らして走る消防車に乗り、水圧によるけながら放水した時にとっても興奮した事を覚えている。大変さより勝るものがあるから続けてこられた」と話し、久美子さんは「普通のおじさんとおばさんにはできない事ができて、子どもが大きくなった今でも、活動の事で助け合ったりできるし夫婦の会話でネタが尽きない」と笑います。



資機材の点検も大切な活動(克文さん)



救命講習と訓練(久美子さん)



消防車両で活動に出発(克文さん)



分団長らしくきりと敬礼(久美子さん)

「夫婦分団長は、お二人とも仲間から『頑張ってるほい!!』と言われるうちは、ずっと消防団の活動を頑張っている」と思っています。とほにかんだような笑顔を浮かべていました。